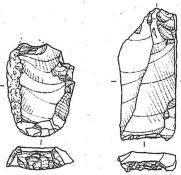


雲仙市文化財調査報告書（概報） 第2集

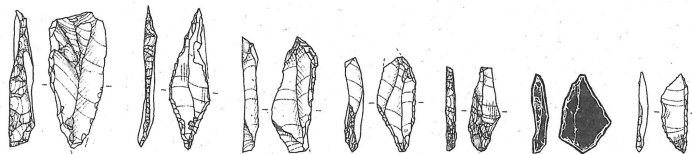
ryouu shinshouji
龍王遺跡Ⅱ・真正寺条里跡

（旧石器時代編）

—国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—



2007
長崎県雲仙市教育委員会



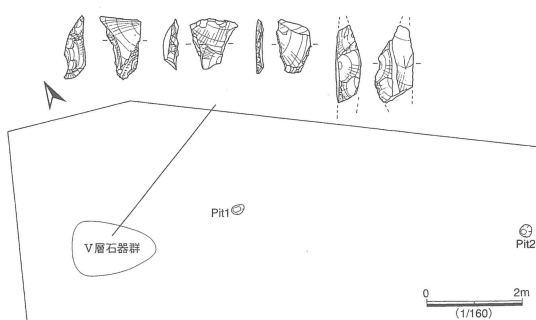
第5章 総括

第1節 概要

—各地点の状況—

これまで述べたとおり、龍王遺跡・真正寺条里跡では6箇所よりまとまりのある石器群が検出されている。各石器群で石材や組成の違いがあることは述べたが、ここではもう少し細かく各石器群の様子を見てみたい。

龍王遺跡4区：計6点（実測図では5点）の黒色黒曜石製の石器がAT下位の暗色帯（第Ⅶ層）から検出されている。石材は肉眼観察ではあるがいずれも同一と考えられ、特に、風倒木痕出土のナイフ形石器を除く5点は同一母岩の可能性もあろう。剥片剥離技術は明瞭な縦長剥片剥離を用いているが、碎片等の検出には至っておらず、当地での石器の加工は行われていない。また、柱穴と考えられるPit群が検出されていることが特筆される。このことについて若干ふれてみたい。同様のものは、雲仙市十園遺跡（辻田・竹中2004）においてもみられる。時期はAT上位と違うものの、石器群と共に2基のPitが検出された事例がある（第54図）。十園遺跡ではAT降灰層準上位に2枚の石器文化層が検出されており、安山岩製剥片尖頭器を含む一群と、黒色黒曜石製台形石器の一群が検出されており、黒色黒曜石製台形石器群に伴うと考えられるPitが2基検出されている。Pit1・Pit2いずれも深さ約40cmで、Pitの間隔は約6mを測る。そこから約2mの距離で黒曜石製台形石器の一群が検出されている。今回検出の龍王遺跡4区Pit群と同じような状況が見られる。検出された遺物も数が少なく、ツールばかりで、チップなどの碎片を含んでいないことも共通する。出土する石器群からは、短期間のキャンプサイト的な場の利用が想定され、検出されたPit群からは、休憩用のテント的な建造物の想像も可能であろう。今回検出されたPit群が建物の柱穴であるとすればどのような建造物と考えられるであろうか。十園遺跡の2基のPitはほぼ垂直に掘られており、直立する2本の柱が立つものと考えられる。柱と柱の間に木を渡せば三角屋根のいわゆる「テント」が復原されそうである。これに対して龍王遺跡4区のPit群は3基の深さのある直列するものとそれに対応するような3基の浅い窪み状のものである。深さのある3基のPitには直立する柱が立つものと考えられ、その柱に向かって対応する3基の窪み状のPit群から斜めに渡せば、3本の直列するPit群方向に入口をもつ斜めの屋根をもつ「テント」が復原できそうである。もちろん、Pit状遺構の全てをテントなどの建物の柱と考えるのは少々乱暴であろう。狩猟で獲た動物の処理用（干し肉加工など）物干しなどの可能性も考えられよう。今概報では可能性として示しておく。今後旧石器時代の遺構検出の増加事例を待つて検討を行うことが必要であろう。図版2の三段目の写真は「テント入口前で猟の準備を行う旧石器人」のイメージである（写真では手前の浅い窪み状のPitにも竹を直立させている）。



第54図 雲仙市十園遺跡32区・33区のPitと石器群

龍王遺跡4区の石器群は出土数の制限から石器群の組成を検討することは不可能である。しかしながら明確な縦長剥片剥離技術の存在。打面をほぼ一端に固定していた石核から剥離されたであろう剥片。基部裏面に調整を施すナイフ形石器。など、後述する龍王遺跡倉地川地区と同様の状況が見られる。出土層位についても、AT下位の暗色帯と考えられる第Ⅶ層からの出土であり、龍王遺跡倉地川地区と同様のAT下位の石器群として捉えることが可能であろう。

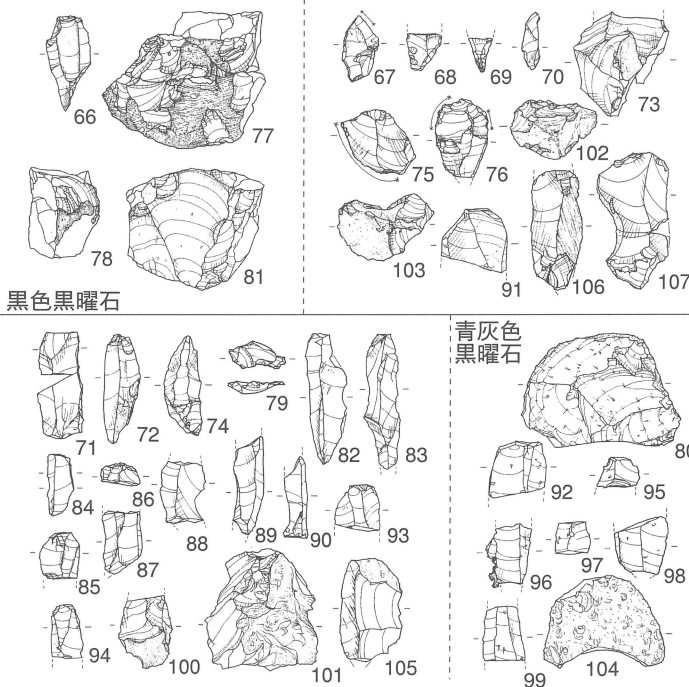
龍王遺跡倉地川地区：第3章で述べたとおり、僅かな期間しか調査できなかったため調査精度は極めて悪いが、多くの石器を検出することができた。当地区は試掘調査時点では遺跡の存在が確認されず、龍王遺跡の範囲からは町道（現市道）を挟んで向かい側の、発掘調査対象地の外であった。台風一過の2004年8月30日の午後、発掘現場の確認で現地を見回り中に、調査対象地外の工事区域（倉地川地区）で第Ⅶ層・第Ⅷ層の露出している部分があり、土層の堆積状況を観察に訪れた。そこで第Ⅶ層中にナイフ形石器（11頁・第11図8）を発見。さらにその上層の黄色土から押型文土器を発見した。翌日の8月31日、工事業者の了解を得て、押型文土器の検出された黄色土を掘削すると、その黄色土を切り込むように方形周溝墓が検出され、さらには前方後円墳まで発見されることとなった。工事主体側との協議の結果、「龍王遺跡倉地川地区」として発掘調査を行うこととなった。しかしながら、当所から調査対象地として設定されておらず、調査期間は最大でも10月末日まで。当然上層にある方形周溝墓・前方後円墳からの調査を行ったが、縄文時代・旧石器時代の調査に残された時間は4日間という短期間であり、古墳調査時にすでに露出している土器や石器をドットで取上げ、来るべき最後の4日間に最大限の成果が望まれるよう調査区割りや調査方法を検討した。その結果、明らかに縄文時代の石器であろうと考えられるものを除いて、約150点ほどの石器（黒曜石以外の石材も含む）が検出され、そのほとんどは質の良い黒色黒曜石製のものであった。第3章で述べているとおり、安山岩製の剥片尖頭器など時期の新しいものと考えられるものや、17頁第18図の後期旧石器時代初頭の石器群と考えられる石器群も検出されているが、そのほとんどはナイフ形石器を主体とする黒色黒曜石石器群として一括できると考えている。特に最も石器の集中するG-2グリッド及びその脇のG-1グリッドではすべての石器が黒色黒曜石製で占められており、先の考えを補強するものであろう。調査の精度が粗いためチップやブランディングチップなどの碎片類の検出には至っていないが、背面に大きく礫面を残す大型の剥片類。打面再生剥片などの剥片剥離に伴う石器類。また、剥離されたであろう縦長剥片。そして、完成品であるナイフ形石器類。と、原石の分割から石核の作成、素材剥片の剥離、ツールの成形までの一連の作業がこの地で、もしくは周囲で行われていたことは確実であろう。石器の組成は典型的な2側縁加工ナイフ形石器と小型のナイフ形石器、それに搔器（エンドスクレイパー）である。小型のナイフ形石器は平戸市堤西牟田遺跡（萩原1985）・佐世保上原遺跡（草野1986）・雲仙市百花台遺跡（田川・副島・伴1988）・江迎町根引池遺跡（福田2000）などにみられ、先鋭な細身の資料が検出されている。倉地川地区出土の資料は小型ではあるが、上原遺跡や堤西牟田遺跡に比べると先鋭さが欠ける資料である。また、ナイフ形石器の特徴として、基部裏面の顕著な平坦剥離があろう。ほとんどの資料で確認でき、堤西牟田遺跡・上原遺跡・百花台遺跡・根引池遺跡でも確認することができる。剥片剥離技術は明瞭な縦長剥片剥離技術を用いており、12頁第12図23のエンドスクレイパーについても縦長薄片を素材としている。また、11頁第11図6のナイフ形石器を除けば、縦長剥片剥離の打面は一端に固定されている状況がうかがえる。石材については第3章で述べたとおり、科学分析を行っていないので推測の域を出ないが、そのほとんどが佐賀県伊万里市腰岳中腹（鈴桶遺跡周辺）の良質の黒色黒曜石を選択している。また、その特徴的な礫面から松浦市星鹿半島産の円礫と確認できるものも2点（うち1点は12頁第12図22）見られる。

龍王遺跡倉地川地区は調査精度こそ粗いものの、剥片剥離技術や石器の組成などからAT下位の石器群として捉えられるであろう。また、AT降灰層準こそ見られなかったものの、周辺の火山灰分析結果と検討からもAT下位の暗色帯出土石器群として、その位置付けを明確なものとするのが可能である。前述の龍王遺跡4区石器群と共に島原半島におけるAT下位石器群の様相を検討する上で重要な資料となろう。最終日の夕暮れ、暗くなる頃には石器の取上げは無事終了したが、土層図が翌日早朝となった。図版3左上が早朝の倉地川地区。そのすぐ右側には重機が待ち構えている。

龍王遺跡 5区・6区：縦長剥片素材のナイフ形石器を主体とする石器群が検出されている。20頁第21図を見てもわかるとおり、1箇所の密度の高い集中地点とその周囲にまばらに広がるように検出されている。そのほとんどが1時期に存在していたものと考えて問題ないであろう。石材は青灰色黒曜石が最も数的に多いが、黒色黒曜石製石器には石核も含まれており、石材の質量的には拮抗すると考えられる。21頁第22図にナイフ形石器を図示したが、66・71・72のように打点部分をそのまま残すものが見られる。また、69のように基部裏面に平坦剥離を施すものも見られる。ナイフ形石器のほかには定型的な石器がほとんど見られないが、そのことが龍王遺跡5区・6区の石器群の特徴を示すかどうかは疑問である。なぜならば、第3章でも述べたが、5区・6区の石器群のほかにも近隣して同様の石器群があったであろう痕跡が見られるからである。第55図は大まかな石材別の分類である。図左上が黒色黒曜石の中でも表面がややざらつくもので、風化による差ではなく、石材そのもののもつ特徴である。完成されたナイフ形石器と石核、背面に大きく礫面を残す剥片。肉眼観察であるため断定はしないが、同一母岩であろう。今回の調査では同様の石材はほとんど見つかっておらず、81の石核から素材剥片の剥離、ナイフ形石器の整形については別地点で行われていることがわかる。また、その右側はその他の黒色黒曜石製石器であるが、素材となる剥片類は余り見当たらない。図下半分は青灰色黒曜石であるが、縦長剥片が多く検出されているが、それに伴う石核やツールは少ない。このように石材別に見てみると、一貫してこの場で石器製作を行っていた様子は見られない。今回図化していないが、ブランディングチップも多く見つかっており、石器製作の最終段階の作業を行っている様子も見られる。その中には安山岩製のものもみられ、本来は石器組成の中に安山岩製のツールも組み込まれていたであろうことが推測される。ただし、検出されているナイフ形石器や剥片については、その多くが破損品や素材としての大きさやその形状が不適当なものが多く、当地区が石器製作の一連の行動の中では廃棄場的な色合いが濃いととも考えられる。

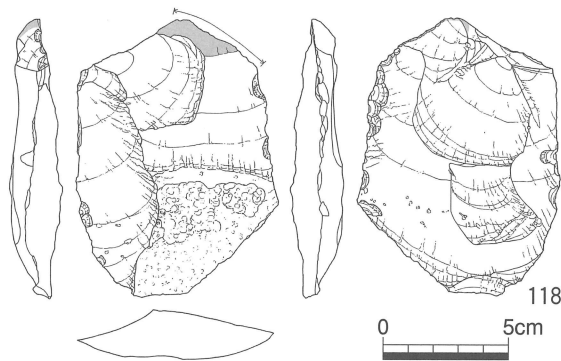
龍王遺跡5区・6区の石器群は火山灰分析の結果AT降灰層準上位から検出されており、龍王遺跡4区及び倉地川地区の石器群より後出するものである。石器の組成については先述のとおり検出状況をそのままに理解することは難しいが、ナイフ形石器が最も主体的な石器ということは言及できであろう。石材は先行する石器群とは大きく異なり、また、検出された石核などから、縦長剥片剥離の

最終段階には打面を大きく入れ替えて剥離を行う状況や、もしくは打面を両端に設定して剥片剥離を行う状況も見取れる。剥片剥離技術からは先行する石器群との差異が見取れる。しかしながら、礫面を大きく残す剥片の存在から、原石に近い状態での素材搬入や、基部裏面の平坦剥離など、先行する石器群との共通点も見出せるため、それほど大きな隔絶はないのであろうか。AT火山灰の降灰は当時の西北九州にも大きな影響を及ぼすと考えられることから、その前後の遺跡の連続性について検討可能な資料となろう。また、石器群に重なるように土坑が確認されている。その機能については不明であるが、検出状況から石器群に伴うものと考えられるものである。



第55図 龍王遺跡5区・6区石材別の出土石器

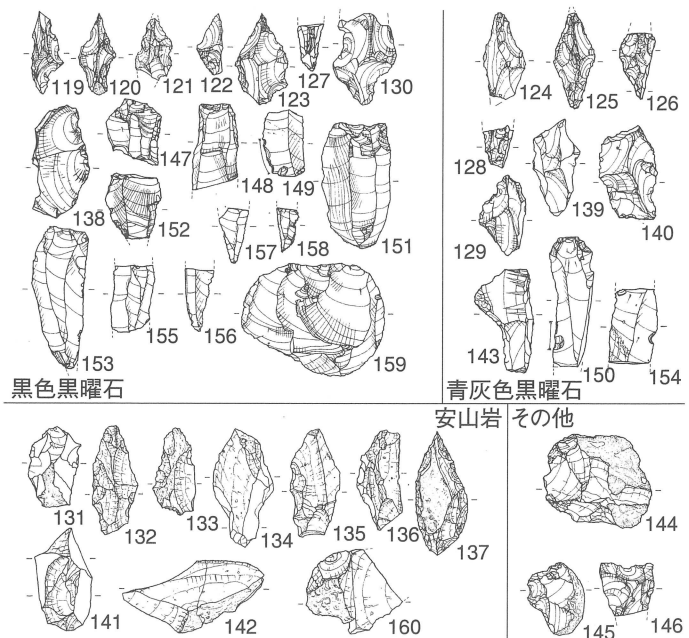
龍王遺跡13区・14区：安山岩製石器がその9割以上を占める石器群で、そのほとんどが31頁第36図116より剥離された碎片類である。116の接合状況からもこの場で剥片剥離を行っていたことは明らかである。共伴する石器は黒色黒曜石製のナイフ形石器。その形態から狸谷型ナイフ形石器と考えられる。その他西北九州では見られない堆積岩系の石材による大型スクレイパー、同じく西北九州では見られない凝灰岩系の石材による、縦長剥片剥離を行っていたであろう石核から剥離された打面再生剥片（周囲に使用痕らしい小剥離がみられ、スクレイパーとして使用されていた可能性もある）。佐世保市福井洞穴周辺に見られるいわゆる北松浦玄武岩製の剥片などがある。116の安山岩製石器は表面がざらつき、碎片類のほとんどはそれと同一母岩と考えられるが、表面の滑らかな別個体の安山岩と考えられる碎片類もあり、いずれも剥片剥離を行っていたと考えられる。この安山岩製石器以外のものはほとんど碎片が見られず、当地での剥片剥離はほとんど行われていないと考えられる。龍王遺跡5区・6区のように周囲に別の石器集中地点がある可能性も考えられるが、周辺の調査では、それらしい石器の検出には至っていない。また、龍王遺跡5区・6区のような石材の持ち出しや搬入といった痕跡も見られないことから、非常に短期的な滞在による痕跡とも考えられる。また、石材についてもそのほとんどが他地区と大きく異なっており、遺跡の成り立ち自体が異なるような印象を受ける。



第56図 29頁第34図112摩滅範囲（アミ）

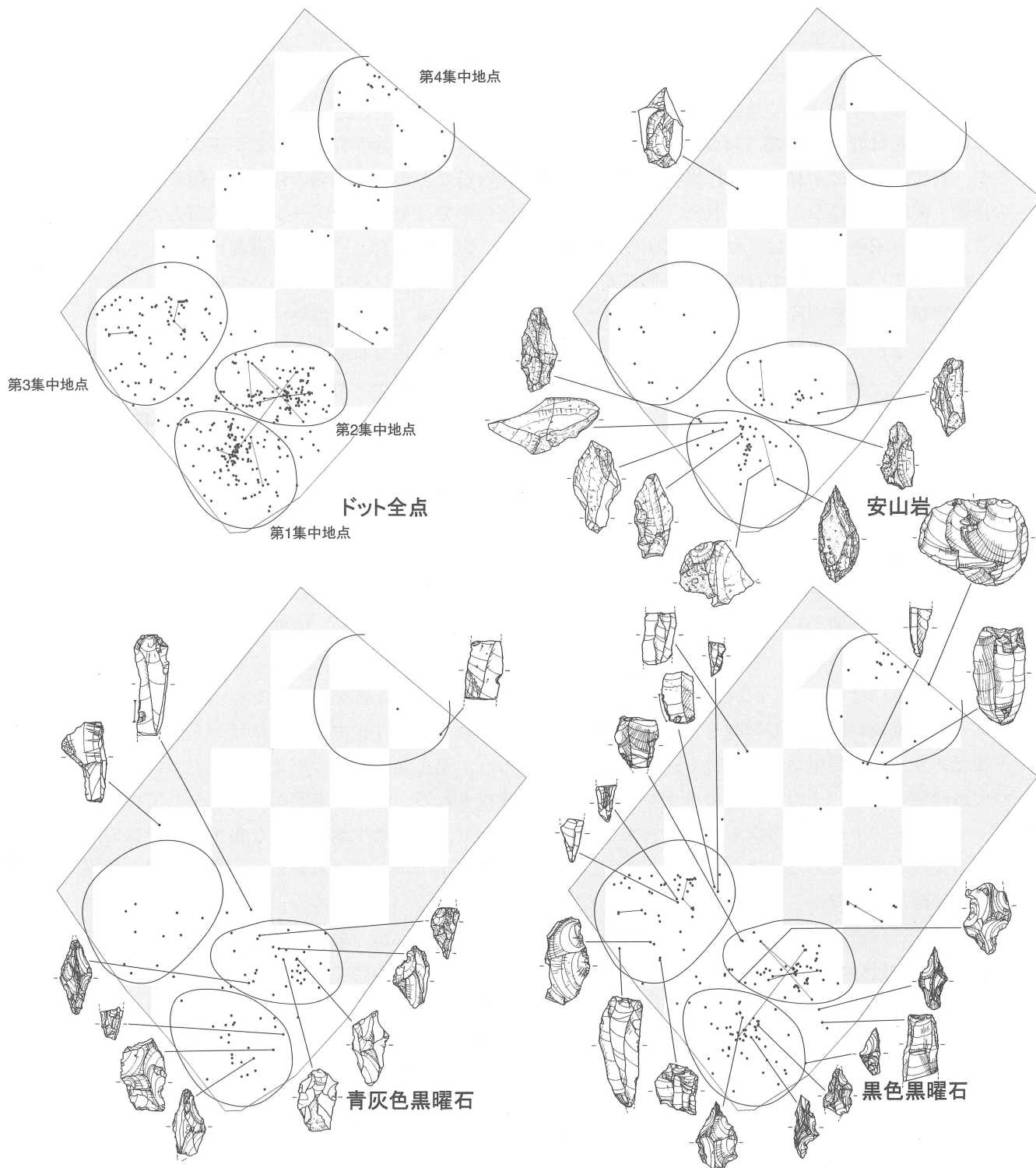
28頁第32図108のナイフ形石器や29頁第33図112の大型のスクレイパーにはいずれも顕著な使用痕が残されている。狸谷型ナイフ形石器の刃部は素材剥片のエッジ部分であるが、刃部を使って「切る」動作というよりも、搔器状の「搔く」動作を行ったような痕跡が見られる。主要剥離面側から若干弧状となる刃部に非常に細かい剥離が見られる。また、大型スクレイパーは第56図に示す範囲に摩滅したような痕跡が見られる。特に背面側から打面部にかけては本来角張っているであろう部分が丸みを帯びている。全周にわたって摩滅した部分が見られるが、図示した範囲が最も顕著で、背面を下にして浅い角度で石器を動かしていたと考えられる。いずれの石器からもかなり長期間にわたる使用が想定される。また、検出された場所は丘陵上部ではなく、より河川に近い部分であり、搔器・削器状の石器の利用も検出された場所との関わりがあるのであろうか。29頁第33図111の打面再生剥片の存在から、縦長剥片素材の石器群の存在も推測されるが検出には至っていない。

龍王遺跡13区・14区からは石器検出層より下位でAT火山灰がブロック状に残存している状況が確認されている。狸谷型ナイフ形石器の検出もあり、AT上位の石器群として石器組成からも土層堆積からも矛盾のないところである。本県地域でAT火山灰がはっきりと目視できた事例はほとんど無く、AT火山灰噴出時の人類活動への影響を考える上でも興味深い事例である。



第57図 真正寺条里跡1区石材別の出土石器

真正寺条里跡1区：今概報中で最も石器の出土量が多い地点である。時間的な制約により未調査の部分もあるが、概ね石器群の全容は捉えられていると考えられる。調査対象地を4m×4mのグリッドに分割し調査を行った。各グリッドにおいて出土点数の多い部分について拡張しながら調査を行っているが、出土点数のみだけでなく、風倒木痕などの攪乱部分が顕著なグリッドも調査対象から外している。本来であれば全ての地区を調査対象とすべきであったが、そこまで至らなかった。調査の結果、調査区南側に3箇所の石器集中地点、特に第1集中地点と第2集中地点は顕著なドットの密集が見られる。また、北側にやや散漫ではあるが1ヶ所（第4集中地点）の石器集中地点を検出すること



第58図 真正寺条里跡1区石材別分布状況

ができた。真正寺条里1区は黒色黒曜石製の小型の角錐状石器を主体とする石器群で、後期旧石器時代の中でも後出する時期の石器群である。土層堆積の状況は良好で、火山灰分析の結果からAT降灰層準より上層で検出されており、土層的にも矛盾はない。第58図に石材別の分布状況、74頁第57図が石材別の石器を示しており、若干の検討を行いたい。ただし、黒曜石や安山岩についてもそれぞれに細分が可能であるが、今概報では大きく「黒色黒曜石」・「青灰色黒曜石」・「安山岩」として3種類に分割する。接合関係にある石器については図中に示しているが、実測図の掲載までには至らなかった。また、接合関係については今後増えることが予想され、他地区も含めて再度検討が必要である。

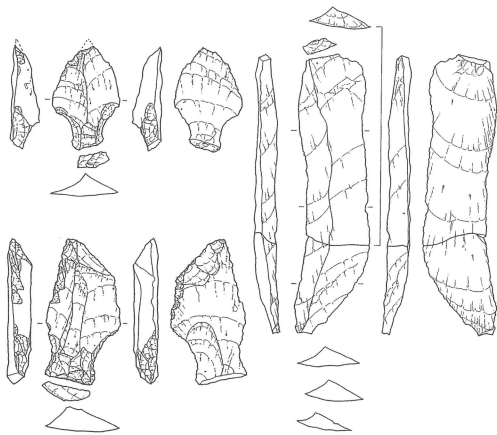
石器集中地点は4地点に見られるが、75頁第58図に示すとおり、全ての地点で黒色黒曜石の分布が顕著である。青灰色黒曜石製や安山岩製の石器はほとんど第1集中地点・第2集中地点に集約されている。また、現在のところ、接合関係についても各集中地点内で終始しているが、前述のとおり、今後の接合作業の進展次第では各地点内で収まるかどうかはわからない。

3種類の石材の石器組成(74頁第57図)を見ると、概ね角錐状石器や尖頭器などが主体となっているが、石材毎に特徴が見られる。黒色黒曜石では角錐状石器などの尖頭器類のほかに、縦長剥片素材の搔器・削器・彫器などが見られる。真正寺条里跡1区の中では最もバリエーションに富んだ組成である。次に青灰色黒曜石は、やはり尖頭器類を主体とし、黒色黒曜石と同様に縦長剥片の存在も見受けられる。また、当地区では唯一の台形石器が出土している。最後に安山岩についてはそのほとんどが尖頭器類で、縦長剥片剥離の痕跡は見られない。真正寺条里跡1区の石器組成は、黒曜石を主体的な素材としながら、それを補うように安山岩製の尖頭器類を組み込む石器群と見ることができようか。また、第57図右下に示した3点は削器・搔器類としているが、石器の周囲を鋸歯状に粗く加工しており、同図147や151などとは若干異なるものである。石材については144が凝灰岩、145・146は灰白色黒曜石で、佐世保市針尾島の古里海岸に見られる黒曜石と思われる石材である。他の石器類とは明らかに石材の選択に差異がみられ、石器の機能別に石材の選択を行っていることも考えられる。

次に、器種別の分布状況について見てみる。角錐状石器などの尖頭器類やその素材としたものについては全てが第1集中地点・第2集中地点に収まる。これに対して、縦長剥片類の分布は第3集中地点・第4集中地点に終始している。全ての石材で同様の尖頭器類が見られる以上、真正寺条里1区の石器群はほぼ一時期の石器群と考えられるため、器種ごとの分布の差異は、時間的な隔たりを示すものではないと考えられる。各地点でそれぞれに異なる石器製作作業を行っていたことが予想される。第4集中地点には159のような残核と考えられるものや、151のような作業面再生を行ったような石器があり主に縦長剥片素材の剥離を主に行っていたと考えられる。第3集中地点ではほとんどが縦長剥片類であり、第4集中地点から持ち込まれたものであろう。第1集中地点・第2集中地点では尖頭器や尖頭器類の素材、また、大量のチップなどの碎片が検出される。また、実測図の掲載をしていないが、ハンマーストーンと考えられる資料も2点出土しており、第1集中地点・第2集中地点では尖頭器類の製作を行っていたと考えられる。また、安山岩や青灰色黒曜石製の石器については、黒色黒曜石製石器群ほど素材から製品までの足取りをたどることができない。もちろん、調査地区外に安山岩製石器群や青灰色黒曜石石器群の集中地点が無いとは言い切れないが、最も主体的に利用する黒色黒曜石は原石に近い状態で遺跡内に搬入し、安山岩や青灰色黒曜石については素材剥片の形で遺跡内に搬入している可能性も考えられよう。また、真正寺条里跡1区は、「廃棄場的な色合いが濃いであろう、とした龍王遺跡5区・6区」に比べると、ツールが非常に豊富である。また、石材や器種ごとにその分布がまとまる状況を見せており、龍王遺跡5区・6区との時期は違うが、遺跡内の場の機能を比較すると、主に人間の活動領域内にあたる地区と考えられる。主に石器製作に関わる場であろう。

真正寺条里跡2区：剥片尖頭器を主体とし・ナイフ形石器・角錐状石器・台形石器・搔器・削器・

彫器を組成する石器群が検出されている。第3章でも述べたとおり中央部に比較的密集した石器の分布があり、それを取り囲むようにツール類が検出されている。中央部の密集した部分にはチップなどの碎片類が多く見られる。先の真正寺条里跡1区とは大きく分布の状況が異なり、石材や器種による分布の差は見られない。また、印象的には龍王遺跡5区・6区と同様のイメージであるが、ツールの破損品が多い龍王遺跡5区・6区とは明らかに違いがある。碎片類がほとんど検出されない部分でツール類が検出されており、分布の見目は龍王遺跡5区・6区と似ているが、その内容は大きく異なる。真正寺条里跡2区についてもその周囲に同様の石器群の存在が考えられよう。40頁第47図161・162の剥片尖頭器と43頁第50図の剥片類は、肉眼観察ではあるが同一母岩と考えられる。真正寺条里跡2区では同石材は図示した5点しかなく、剥片剥離や、剥片尖頭器の基部調整を行ったであろう碎片類は見つかっていない。また、42頁第49図178・179と44頁第51図184のいわゆる北松浦玄武岩もほとんど碎片などが見られず、別地点での剥片剥離の可能性があろう。それに比べて中央部分に分布する碎片類はほとんどが黒色黒曜石と青灰色黒曜石であり、一部の剥片尖頭器や台形石器などの製作を行っていたと考えられる。178や179は折れてしまっているが、剥片尖頭器の素材としては十分なものであったろう。



第59図 雲仙市国見町十園遺跡出土石器 (1/3)

真正寺条里2区の石器出土層位はAT降灰層準と考えられる第Vb層より上位である。主体的な石器である剥片尖頭器はAT降灰後に登場するもので、層位との矛盾は見られない。また、剥片尖頭器は、基部の幅が広くまた、ノッチ部分がやや上位になるなど新しい要素が見られ、AT後の剥片尖頭器が隆盛する時期でも後半期にあたりと考えられる。また、同様の時期の石器群と考えられる、雲仙市十園遺跡(辻田・竹中2004)でも、剥片尖頭器と、その素材と考えられる縦長剥片が検出(第59図:S=1/3)されており、素材と考えられる縦長剥片を携行する様子が伺える。

第8表 器種別の石器出土数

器種	龍王遺跡4区	倉地川地区	龍王遺跡5区・6区	龍王遺跡13区・14区	真正寺条里跡1区	真正寺条里跡2区
ナイフ形石器	2	14	7	1		1
搔器					2	1
搔器(エンドスクレイパー)		2				
剥片尖頭器						6
尖頭器					5	1
角錐状石器					7	1
三面加工尖頭器					4	
台形石器						3
削器					4	2
彫器					1	1
加工痕のある剥片			1			2
ハンマーストーン					2	
使用痕のある剥片			4		12	
石核・残核		1	2	1	1	1
縦長剥片	3	17	20		8	2
打面再生剥片		4	1	1		
作業面再生剥片		1				1
クレストッドフレイク		1				
局部磨製スクレイパー				1		
プランティングチップ			19			1
その他(剥片・碎片類)		93	143	126	336	180
計	5	133	197	130	382	203

第2節 まとめ

—調査の成果—

これまで見てきたように、龍王遺跡・真正寺条里跡では6箇所から石器群が検出されている。各石器群の状況については前節にて大まかに述べてきたが、最後に各石器群の位置付けについて若干考えてみたい。

AT降灰層準を境として、その下位に2箇所（龍王遺跡4区、龍王遺跡倉地川地区）、上位に4箇所（龍王遺跡5区・6区、龍王遺跡13区・14区、真正寺条里跡1区、真正寺条里跡2区）が検出されており、大きく分けて2時期の石器群と捉えることができるであろう。AT降灰層準下位の石器群の特徴は、黒色黒曜石による明瞭な縦長剥片剥離技術を用いた石器群である。その主な組成はナイフ形石器とエンドスクレイパーからなり、ナイフ形石器は小型のものが特徴的に伴う。西北九州の編年（萩原1995・2006）の中では2期終末～3期初頭のAT降灰直下の石器群と考えられよう。島原半島では長崎県域の中でもAT直下の暗色帯（本概報第Ⅶ層や百花台遺跡群第Ⅶ層）が比較的発達するが、熊本地方のように明確にその上位・中位・下位といったような細分可能な状況は今のところ見られない。百花台遺跡群で概期の石器が検出されているものの、それ以外の調査でこれほどまとまって検出されたのは今回が初めてである。百花台遺跡第Ⅶ層石器群でも同様であるが、遠隔地の単一の石材（黒色黒曜石）でまとまっており、石器素材に乏しい島原半島のなかではかなり選択的に石器素材を厳選している様子が伺える。平戸市堤西牟田遺跡第1文化層（萩原1985）でもそのほとんどが単一の石材（白色黒曜石）で占められており共通する要素である。龍王遺跡4区及び龍王遺跡倉地川地区の2箇所の石器群は150m程の距離にある。先後関係があると想定されるが、龍王遺跡4区の資料数が少なく検討できる要素は少ない。ただ、8頁第7図1のような粗い調整は龍王遺跡倉地川地区には見られない。また、素材となる縦長剥片も龍王遺跡4区の方が幅・長さとも上回ると考えられ、時間的な差による変化であろうか。より粗い調整の龍王遺跡4区を1段階古く置くこともできるかもしれないが、今概報では2地区をAT直下の石器群として包括する。

また、龍王遺跡倉地川地区で検出された安山岩製の石器（17頁第18図）は、佐世保市福井洞穴前庭部周辺出土の資料（副島1993・川道2000）と類似性が見られ、後期旧石器時代初頭の石器群の可能性がある。以前にもその可能性のある資料の紹介（川道・辻田2000、辻田2002）を行ったが、いずれもかなり新しい時期の包含層から出土したものであった。今回の試料も2点は古墳周溝による攪乱層、1点はAT下位の暗色帯（第Ⅶ層）掘削時の出土である。第3章でも出土の状況は説明したが、17頁第18図64が出土したB-5グリッドは、黒色黒曜石石器群の集中地点から離れており、やや粗い掘削により調査を行っている。しかしながら風倒木痕などの攪乱は一切見られず、第Ⅶ層の石器群がAT下位の石器群としてこれほどまとまって検出されている中で、この1点（64）のみが上位の土層から入り込んできたとは考えにくい。3点とも少なくとも第Ⅶ層以下の土層に包含されていたであろうことは言及できよう。これまでよりその出土状況についても原位置に近づいてきていると考えられる。

AT降灰層準上位の土層から検出された計4箇所の石器群は、下位の石器群に対して、石材・組成ともにバラエティに富む。AT降灰後に特徴的に見られる剥片尖頭器や角錐状石器などが地点を違えてまとまって検出されている。特に真正寺条里跡1区では地区内に4箇所の石器集中地点を持ち、石材・器種によって分布が異なる状況も見られる。西北九州の編年（萩原1995・2006）の中では第3期から第4期初頭の石器群である。龍王遺跡5区・6区では縦長剥片素材のナイフ形石器が主体であり、下位の石器群と石材や剥片剥離技術は相違が見られるものの、細部調整などに共通点が見出される。また、剥片尖頭器や国府型ナイフ形石器、角錐状石器など後出する石器群の要素も見られないことから、AT降灰後の中でも、比較的早い時期のものと考えられる。また、打面残置のナイフ形石器にも注目しておきたい。龍王遺跡13区・14区からは黒色黒曜石製の狸谷型ナイフ形石器が1点検出されて

いる。また、その他の石材についても他の5箇所と大きくその内容が異なり、肥後系の石材とも考えられ、熊本地方からの人の動きも考えられよう。真正寺条里跡2区で検出されている剥片尖頭器は基部が広くやや上方にノッチ状の調整が見られることからより後出する要素を示している。また、共伴する台形石器は枝去木型であり、これまた新しい要素を示すものである。西北九州の編年では第3期後半にあたる石器群である。真正寺条里1区は最も数多くの石器が検出され、第3章及び前節で若干の検討を試みている。黒色黒曜石・青灰色黒曜石及び安山岩を用いた角錐状石器を主体とする尖頭器石器群で、そこに黒色黒曜石製の縦長剥片素材の石器群が加わるものと考えられる。縦長剥片素材の明確なツールは検出されなかったが、その存在を推測することは容易であろう。また、黒色黒曜石の分布の中で、角錐状石器群と縦長剥片石器群は明確にその分布域を分けることが判る。また、それらの接合関係も未だ見出していない。よって時間的なずれがあることも考えられる。しかしながら、34頁第39図119・120の角錐状石器背面に残された礫面は、37頁第44図159の円礫表皮の風化面と同様である。肉眼観察ではあるが、ほとんど同質の石材と考えられ、分布の差は時間的な差ではなく、場の利用の差と考えている。また、調査中も検出状況に差異は見られず、水直分布でも同様の様な堆積を見せており、現在のところは真正寺条里跡1区の石器群はほぼ同一の時期の石器群と捉えたい。

—自然科学分析—

今概報では6地点全てで火山灰分析を行っており、その成果については前章で報告されている。龍王遺跡4区及び龍王遺跡倉地川地区では指標となる火山灰のピークが検出されなかったが、それを補う形で他地区の成果を引用できたことは大きな成果である。今後の調査においても可能な限りの分析を行わなければならない。

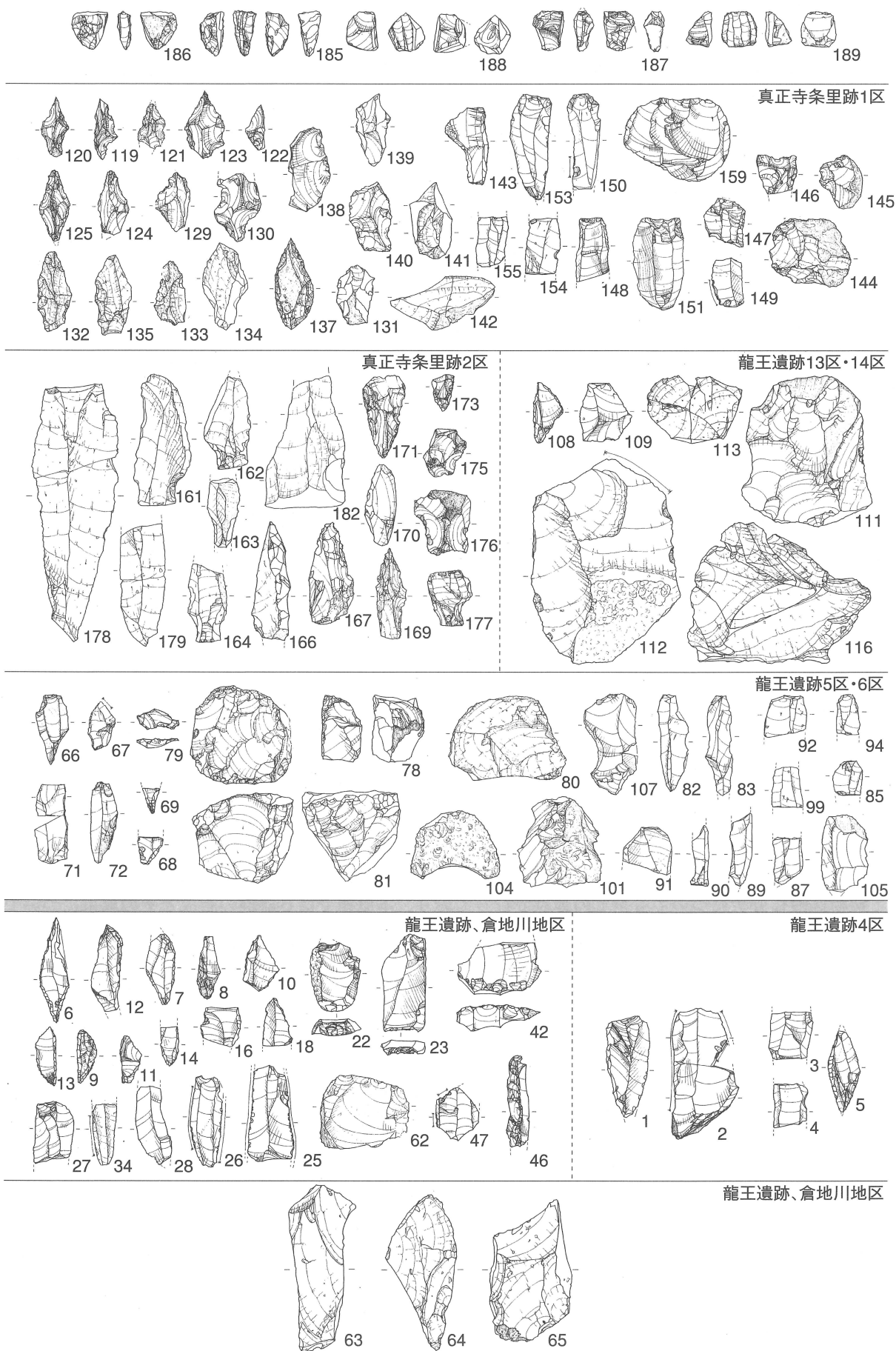
放射性年代測定値(64頁)は4点を提示している。龍王遺跡13区・14区の石器集中地点で取上げた炭化物(Na1)と、同じく13区石器出土層下層の第Ⅶ層相当層の腐食質土壌(Na2・Na3)。及び真正寺条里跡1区のAT降灰層準下層の腐食質土壌(Na4)である。年代値を見ると判るがAT層準下位の土層であるNa2・3・4についてはかなり新しい数値となっている。AT上位の炭化物であるNa1については年代が逆転するような矛盾は見られない。腐食質土壌については火山灰分析の成果からは逆転した数値となっている。3点とも同様な数値となっており、試料の変質などによるものだろうか。当地区が水田地帯ということも因果関係があるのか、いずれにしても正しいデータが抽出できなかったのは残念である。

植物珪酸体分析についても全ての地点で行っており、本概報では石器群の組成とその成果について言及に至らなかったが、今後の整理作業の中でその成果を果たしたい。

—おわりに—

80頁第60図に今概報の石器群の大まかな編年を示す。大きく6時期の石器群が検出されている。重層関係にある資料は無かったが、これまでの調査成果や火山灰分析結果などから、島原半島北側の低標高域に広がる旧石器時代石器群の様相を、ある程度把握することができたと考えられる。これまで百花台遺跡群周辺の高標高地域にその分布が知られていた旧石器時代～縄文時代草創期・早期の遺跡群であったが、近年ではその分布域が拡散している。当該時期は海水面の下降により島原半島は「半島」ではなく「内陸」にあたる。有明海や橘湾の海底にも多くの遺跡が残されているであろうことは誰の目にも明らかであり、今後も多くの当該時期の遺跡が発見される可能性は十分にある。

今概報では接合関係にある遺物実測図の図示ができておらず、十分なデータを提示できなかった。また、接合作業も現在進行中で、今後の作業を行う中で多くの資料が見出せることが予想され、今後その資料化を行う責務を全うしたい。石材についても、黒曜石・安山岩など、大分類にとどまっておらず、今後は産地同定分析等も考えながら再度報告する機会を作りたい。



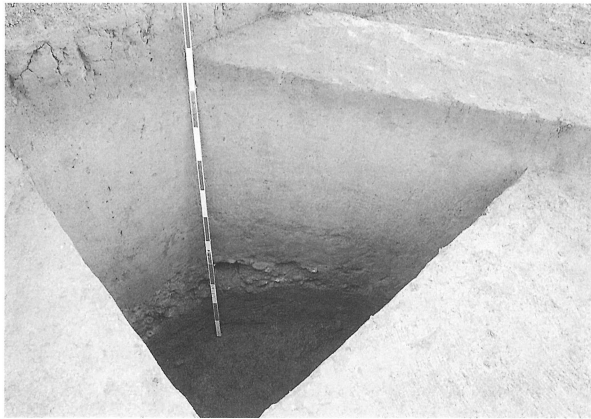
第60図 龍王遺跡・真正寺条里跡の石器群の変遷 (1/3)

【参考文献】

- 雨宮瑞生・下畠和之 2004.4『上ムネ・塚ノ園遺跡』大浦町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 鹿児島県大浦町教育委員会
- 木崎康弘編 1987.3『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告 第90集 熊本県教育委員会
- 草野誠司編 1989『上原遺跡』長崎県文化財調査報告書 第81集 長崎県教育委員会
- 副島和明・伴 耕一郎 1989『魚洗川B遺跡』長崎県文化財調査報告書 第95集 長崎県教育委員会
- 副島和明 1993『福井洞窟－駐車場建設工事に伴う範囲確認調査報告書－』吉井町文化財調査報告書 第2集 長崎県吉井町教育委員会
- 田川 肇・副島和明・伴 耕一郎 1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第92集 長崎県教育委員会
- 田川 肇 1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第116集 長崎県教育委員会
- 辻田直人 2002『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書(概報) 第2集 長崎県国見町教育委員会
- 辻田直人・竹中哲朗 2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告(概報) 第4集 長崎県国見町教育委員会
- 辻田直人 2005『石原遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書(概報) 第6集 長崎県国見町教育委員会
- 萩原博文・加藤有重 1990『大戸遺跡Ⅱ 牟田の原遺跡Ⅱ 津吉遺跡群Ⅱ 平戸城跡Ⅱ』平戸市の文化財31 長崎県平戸市教育委員会
- 萩原博文 1985.3『堤西牟田遺跡』長崎県平戸市教育委員会
- 福田一志編 2000『根引池遺跡』江迎町文化財調査報告書 第2集 長崎県江迎町教育委員会
- 松藤和人 1994『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告 第8冊 同志社大学文学部文化学科
- 川道 寛・辻田直人 2000.2「長崎県国見町の中期旧石器時代と後期旧石器時代初頭の石器群」『旧石器考古学』59 旧石器文化談話会
- 川道 寛 2000.12「福井洞穴第15層石器群の再評価」『九州旧石器』第4号 九州旧石器文化研究会
- 萩原博文 1995「第2章 平戸の旧石器時代」『平戸市史 自然・考古編』平戸市
- 萩原博文 2006「九州西北部の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』(安斎正人・佐藤宏之編) (株)同成社
- 旧石器文化談話会 2001『旧石器考古学辞典』増補改訂 旧石器文化談話会 (株)学生社

圖 版

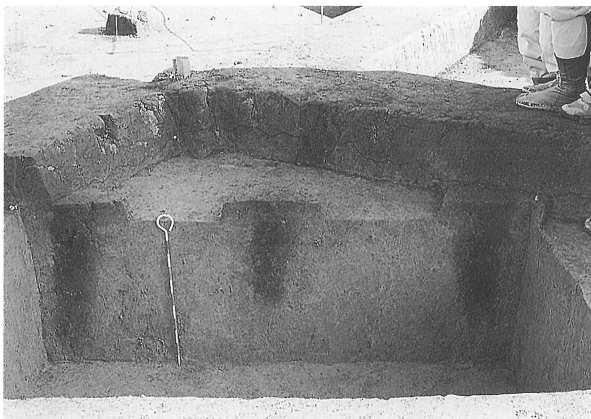
図版 2



龍王 4 区土層堆積状況



龍王 4 区柱穴検出状況



龍王 4 区柱穴半裁状況



龍王 4 区柱穴完掘状況



龍王 4 区完掘状況



龍王 4 区石器検出部分（人）と柱穴の位置（竹）



倉地川地区調査風景



倉地川地区 G-2グリッド石器検出状況



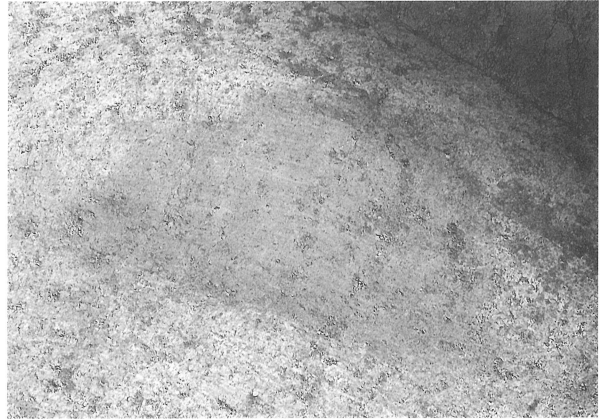
倉地川地区 G-2グリッド東壁土層堆積状況



倉地川地区調査風景（発掘体験による石器の発見！）



龍王 5区・6区石器検出状況



龍王 5区・6区 SK-1検出状況



龍王 5区・6区 SK-1半裁状況



龍王13区・14区調査風景

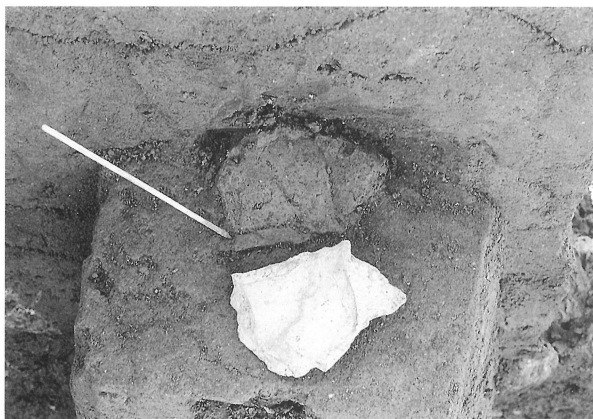


龍王13区・14区土層堆積状況



龍王13区・14区石器検出状況（古墳住居柱穴壁面：第34図）

図版 4



龍王13区・14区石器検出状況（プリント痕：第36図）



真正寺1区調査風景（中央は試掘坑）



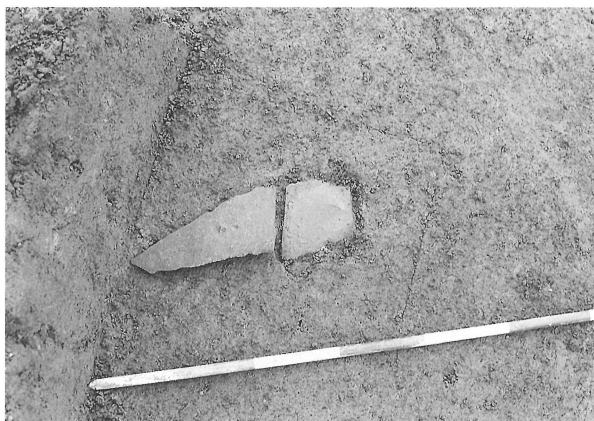
真正寺1区完掘状況



真正寺2区完掘状況



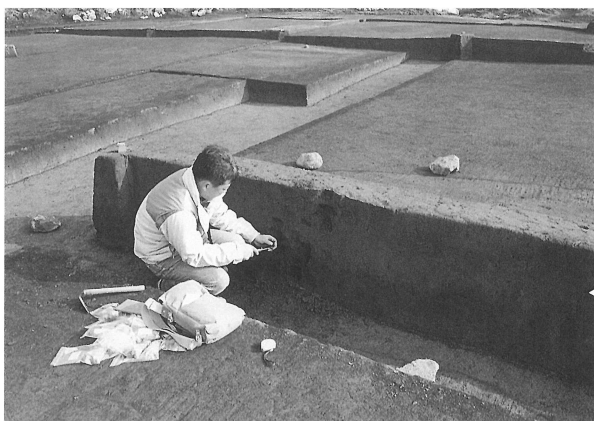
真正寺2区石器検出状況（第47図160）



真正寺2区石器検出状況（第49図178）

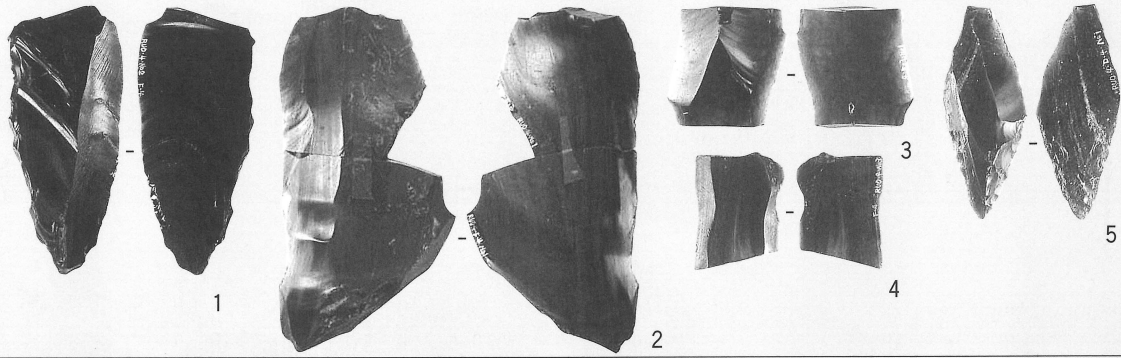


真正寺2区土層堆積状況

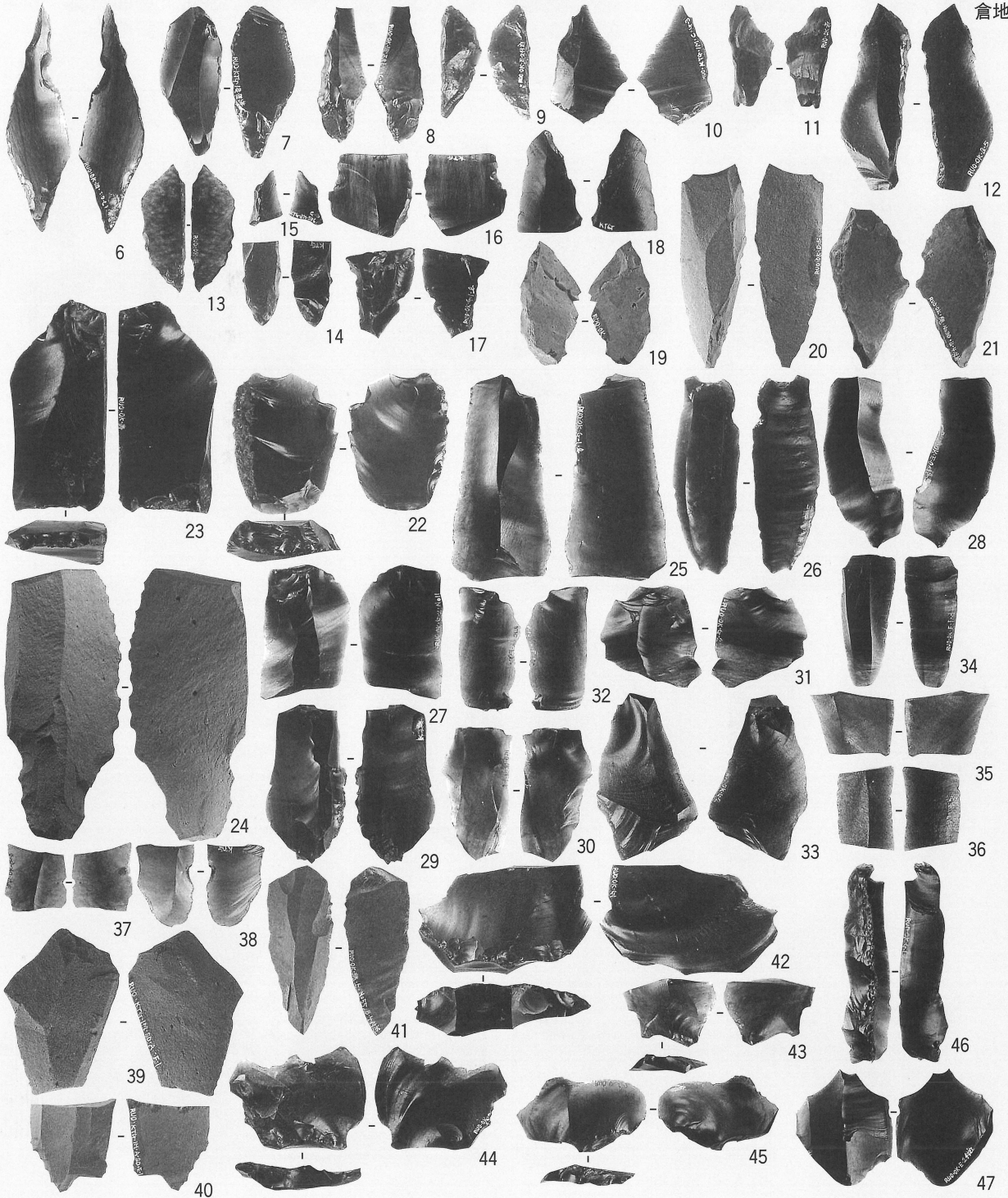


真正寺2区科学分析用土層サンプリング風景

龍王 4 区

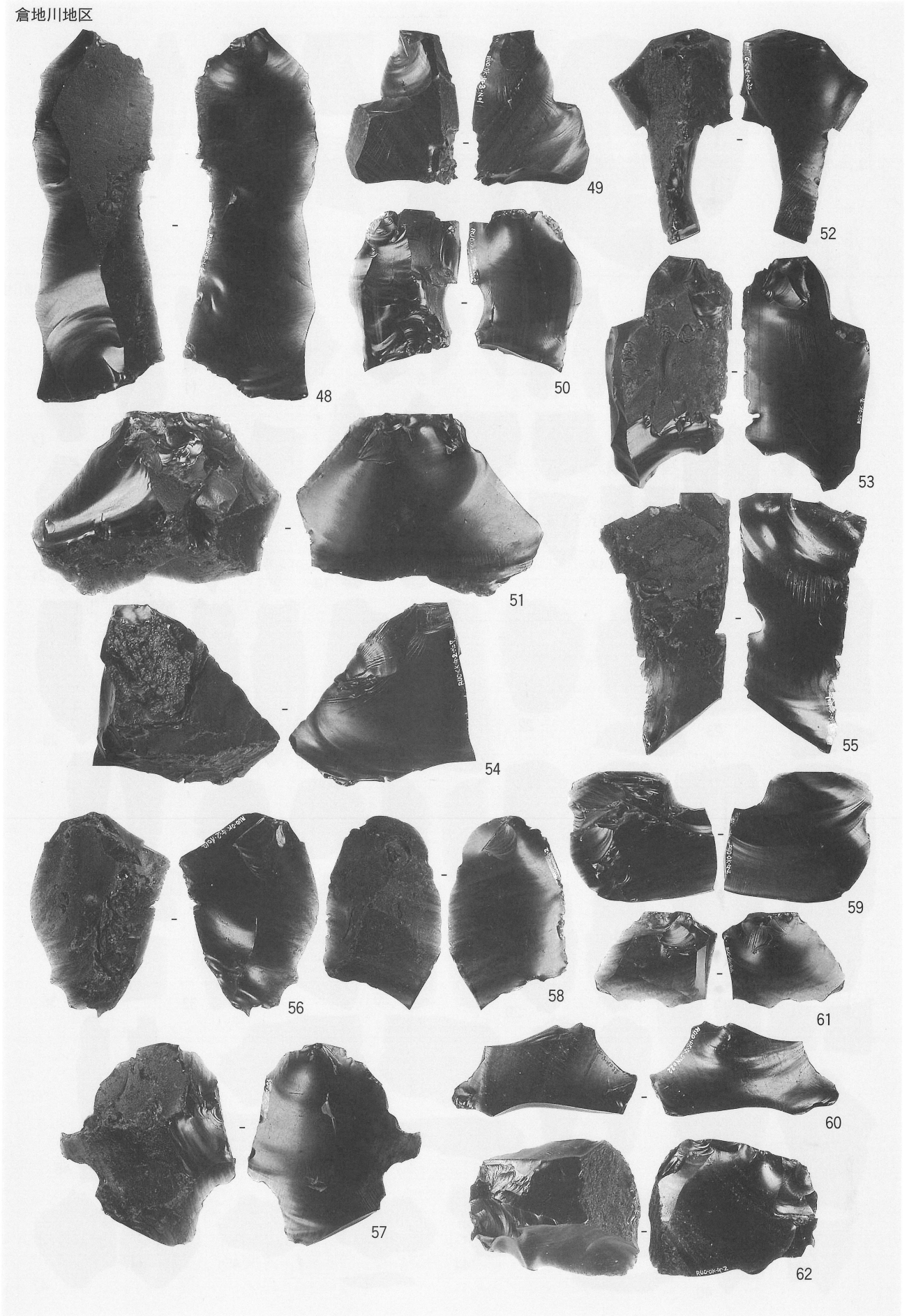


倉地川地区

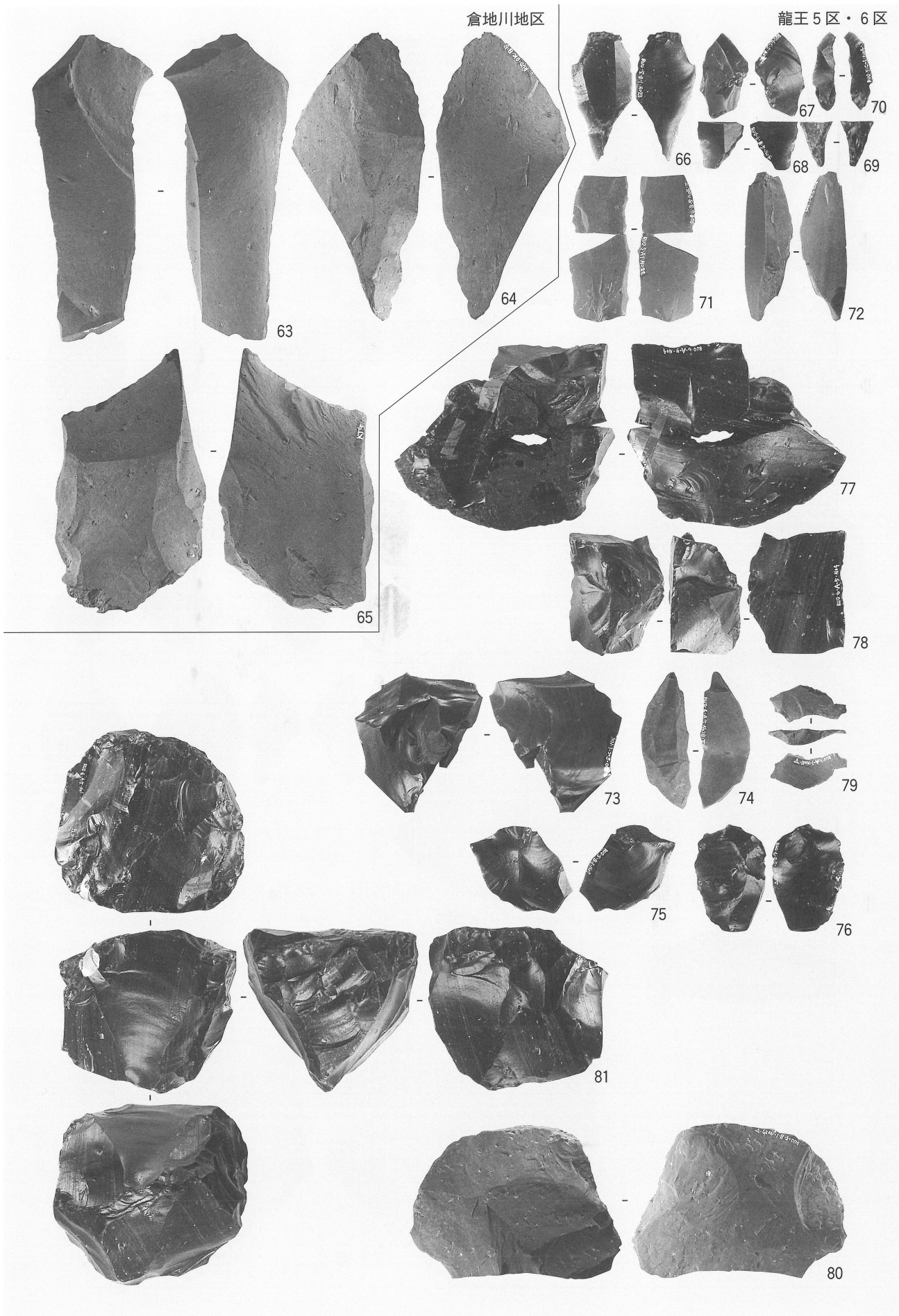


图版 6

倉地川地区

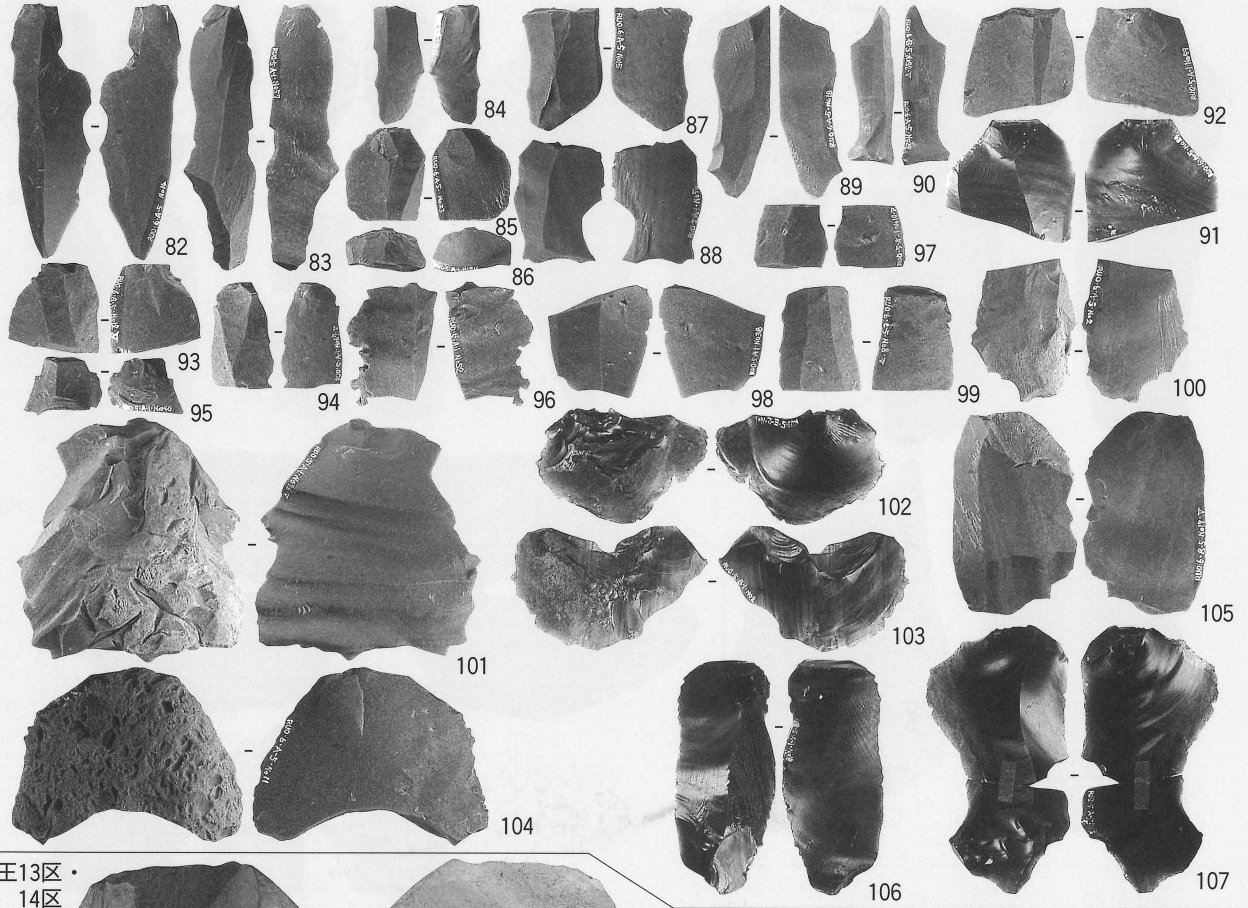


倉地川地区出土石器 (2/3)

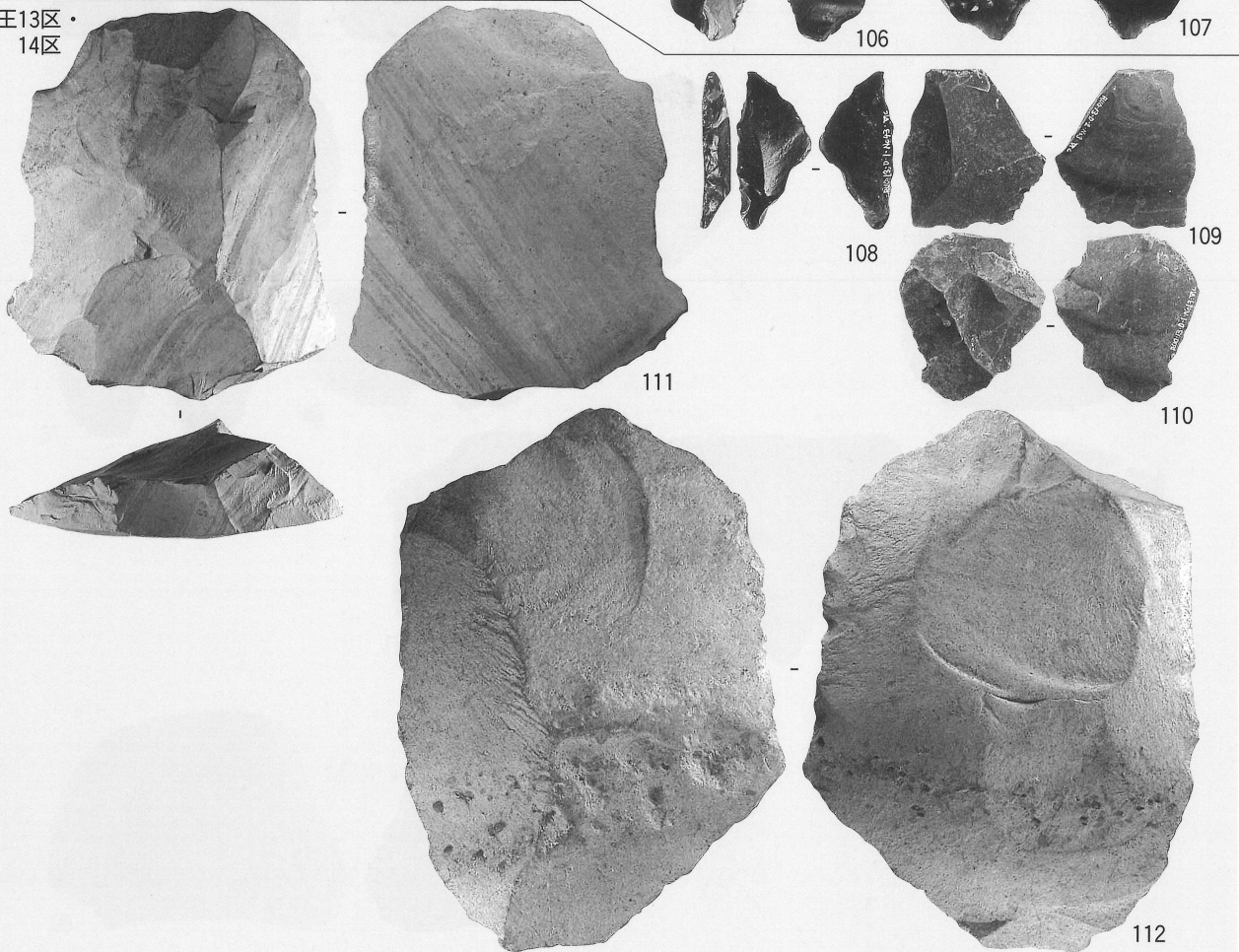


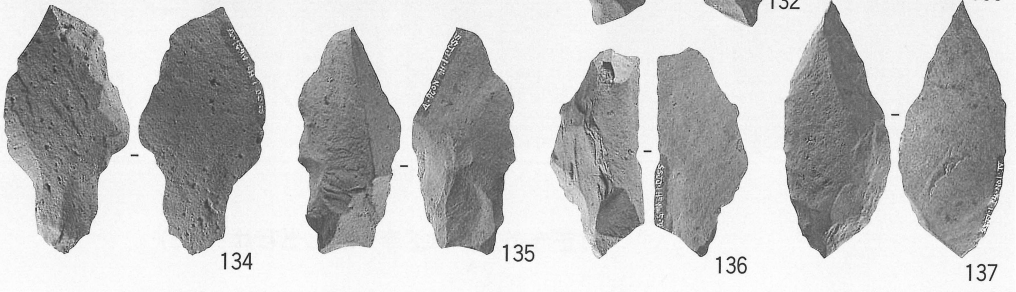
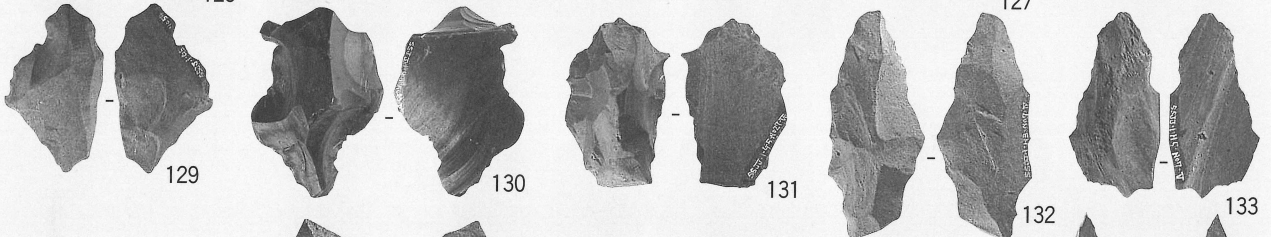
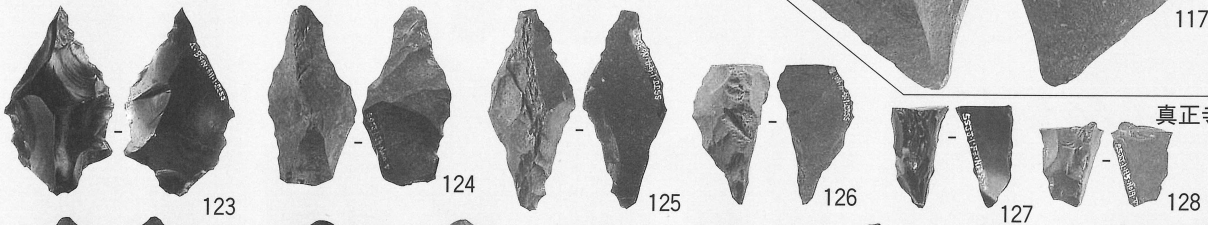
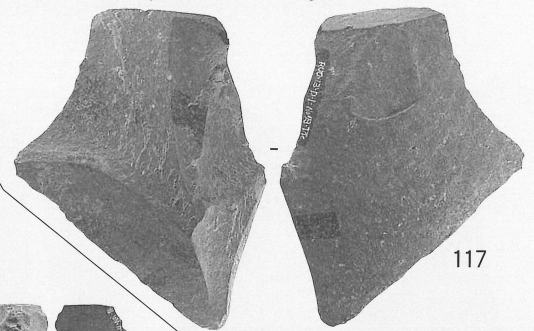
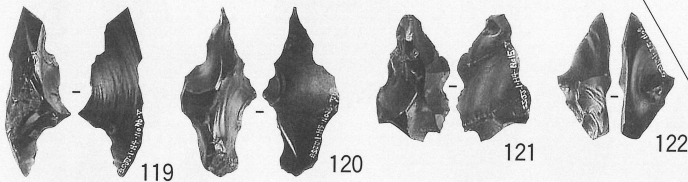
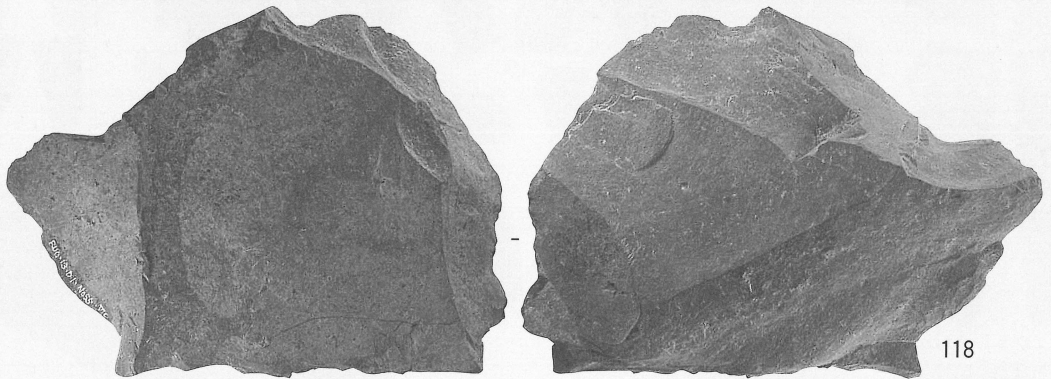
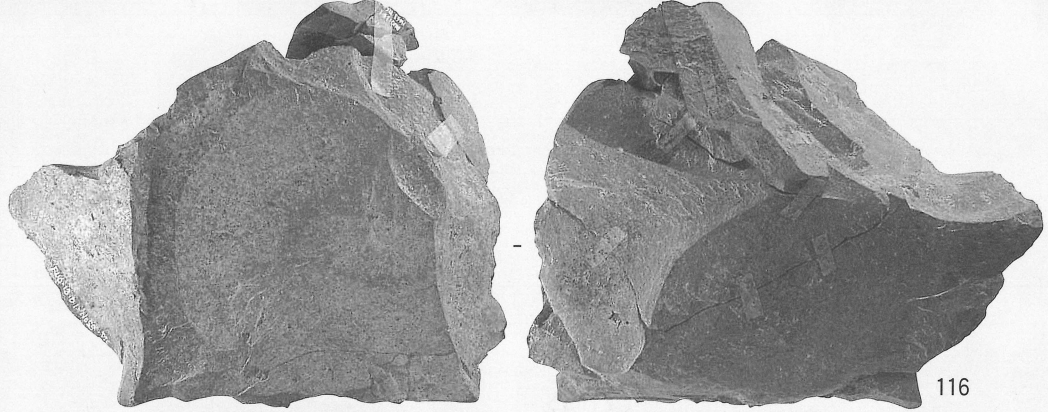
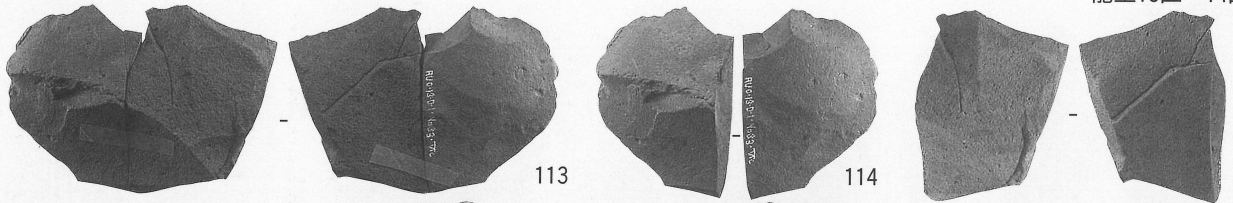
图版 8

龍王5区・6区



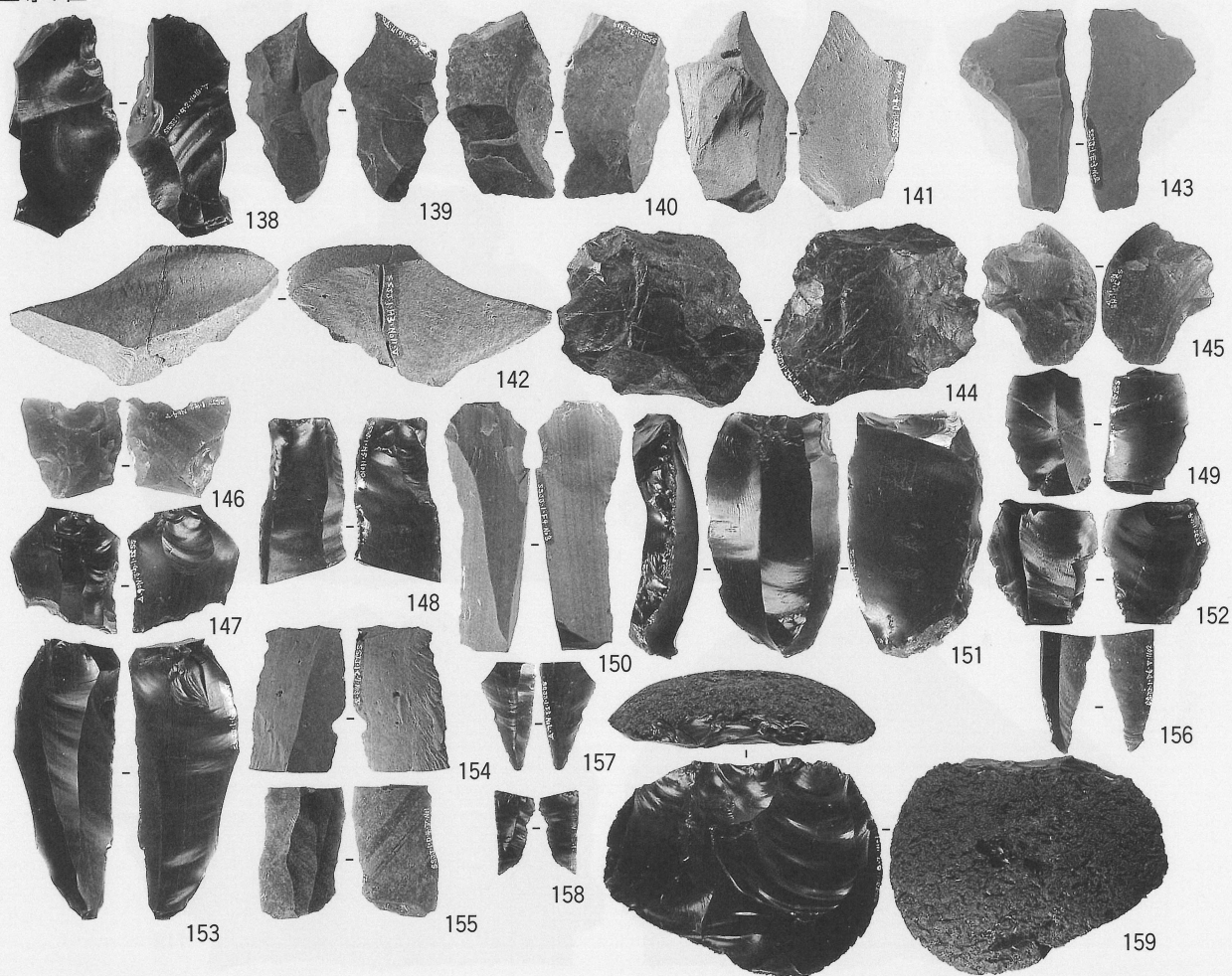
龍王13区・14区



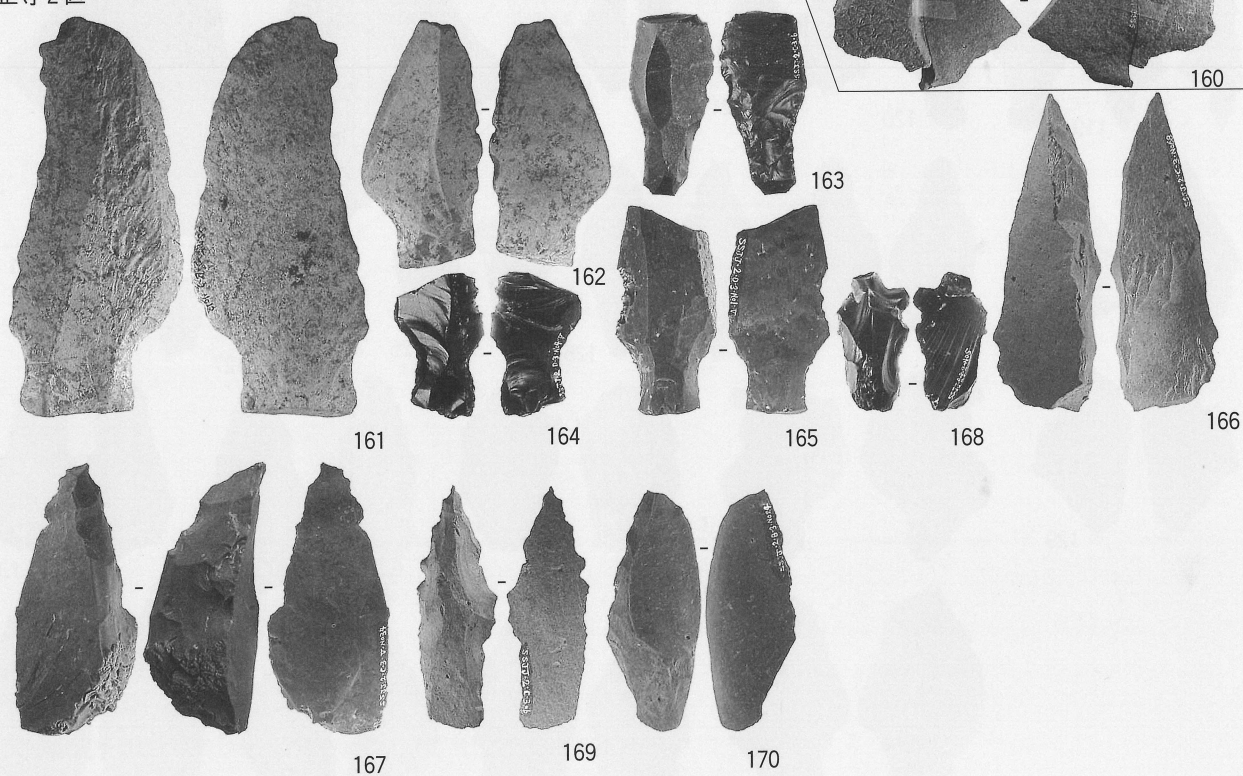


图版10

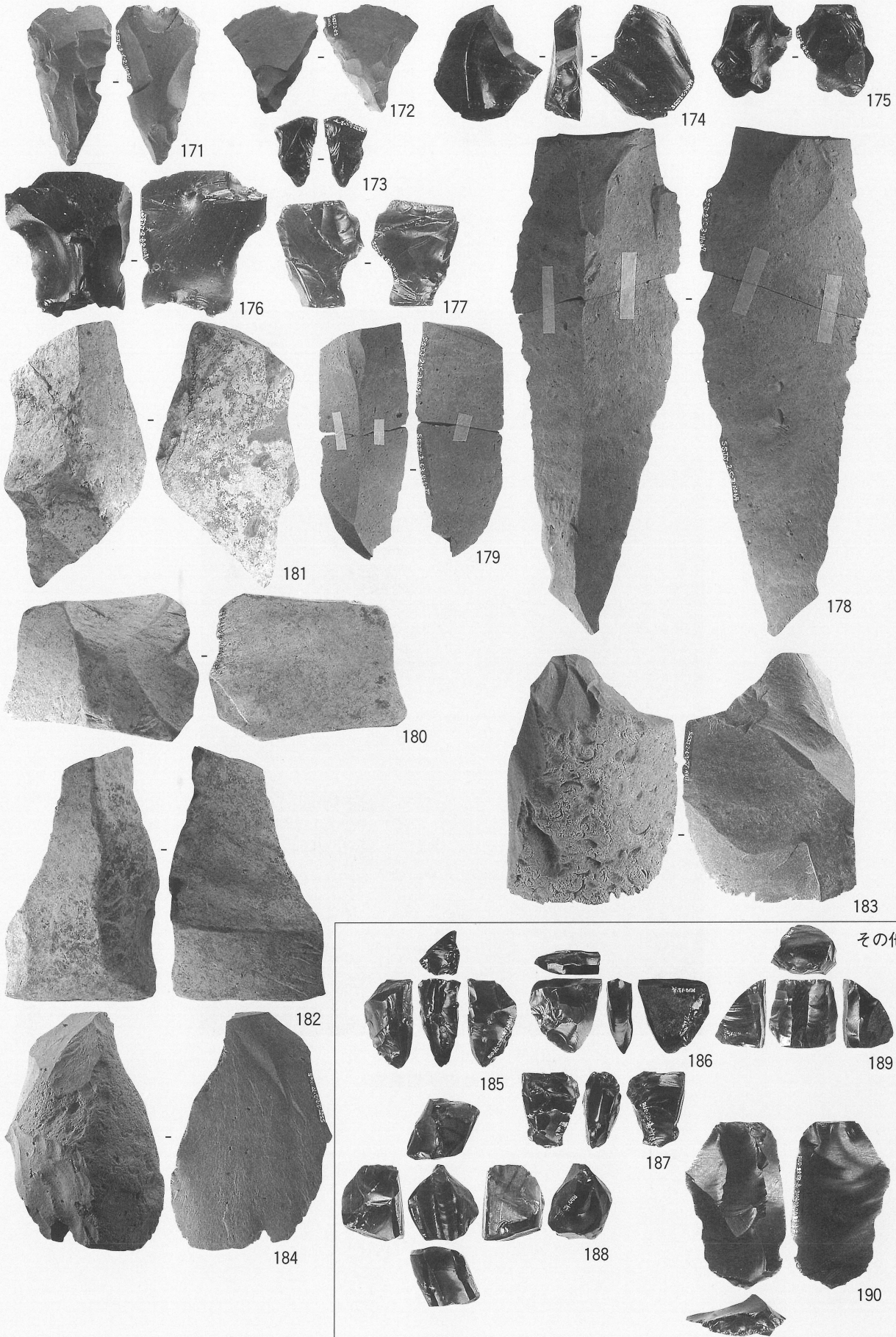
真正寺 1 区



真正寺 2 区



真正寺2区



真正寺2区, その他の出土石器 (2/3)



2004 蓮華草の咲く頃
(龍王遺跡の試掘調査)

報告書抄録

ふりがな	りゅうおういせき つー・しんしょうじじょうりあと									
書名	龍王遺跡Ⅱ・真正寺条里跡									
副書名	旧石器時代編									
巻次										
シリーズ名	雲仙市文化財調査報告書(概報)									
シリーズ番号	第2集									
編著書名	辻田 直人									
編集機関	雲仙市教育委員会									
所在地	〒854-0492 長崎県雲仙市千々石町戊582番地					Tel 0957-37-3113 Fax 0957-37-3112				
発行年月日	西暦2007年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯		東経		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'	°	'			
りゅうおういせき 龍王遺跡	ながさきけんうんぜんし 長崎県雲仙市 くにみちょう 国見町 ひじくろ 土黒	42362	86-64	32°	51'	130°	17'	20040803 20050313	4,000m ²	圃場整備
しんしょうじじょうりあと 真正寺条里跡	いまいで かわはらだ 今出・川原田		86-66	32°	51'	130°	17'			
					53"		38"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項				
龍王遺跡	遺物包含地	後期旧石器時代	石器集中地点 土坑 ピット	ナイフ形石器 搔器 剥片尖頭器 角錐状石器 細石核		AT前後の石器群				
真正寺条里跡										
要 約	<p>龍王遺跡・真正寺条里跡は島原半島北端に広がる火山性山麓扇状地台地上に位置し、石器群の検出された6地点は、遺跡西端を流れる倉地川に沿うように立地している。いずれの地点でも重層関係にある資料は検出されていないが、石材や組成が異なり、それぞれに時期差があるものと考えられる。また、AT火山灰層準の上下で検出されており、AT前後の石器群と捉えられる。AT下位の石器群と考えられる倉地川地区と龍王遺跡4区では、良質な黒色黒曜石を素材としたナイフ形石器を主体とする石器群が検出されている。明瞭な縦長剥片剥離技術を基盤とした石器群で、倉地川地区ではエンドスクレイパーの検出も見られる。また、倉地川地区では打面再生剥片や背面に礫面をもつ大型の剥片も検出されており、原石の搬入から石器製作までの一連の行動を行っていた様子が伺える。龍王遺跡4区では石器出土地点の近隣で、柱穴の痕跡と考えられる遺構も検出されており、石器群に伴う遺構である可能性が高い。AT上位の石器群は龍王遺跡5区・6区、龍王遺跡13区・14区、真正寺条里跡1区、真正寺条里跡2区から、検出されている。地点ごとに組成や石材が異なり、明確な時期差が見て取れる。特に真正寺条里跡2区では剥片尖頭器を主体とする石器群が、また、真正寺条里跡1区では角錐状石器を主体とする石器群が検出されており、AT降灰後の石器群の様相を良く現している。龍王遺跡13区・14区では狸谷型ナイフ形石器と大型のスクレイパー、縦長剥片剥離を行う石核の打面再生剥片などが検出されている。石材が他の5地点とは大きく異なり、これまでの島原半島内の調査ではあまり知られていないものである。島原半島には百花台遺跡群を中心として、旧石器時代の遺跡が集中していることは知られていたが、今回の調査でさらにその範囲が広がることとなった。土層堆積に恵まれない本県地域にとって、ここ島原半島は良好な堆積状況が見られる調査事例が増加している。また、半島自身も普賢岳の活動によりローカルな火山灰が検出されつつあり、より詳細な石器群の変遷を捉えることが可能となってきている。今概報では、石材の産地同定や各地点での石材・器種等による分布状況の検討などは行っておらず、ただ、遺物の出土状況を報告するにとどまっている。今後詳細な分析と検討を行っていかねばならない。</p>									

Abstract

Book title	Ryuou Site II · Shinshouji Site						
Subtitle	the Paleolithic era						
Volume name	Report of an investigation Unzen-City cultural properties						
Volume	Vol 2						
Editors	Naoto Tsujita						
Editorial organization	Unzen-City Board of Education, Nagasaki-Preecture, Japan						
Address	Bo-582, Chijiwa-cho, Unzen-City, Nagasaki-Preecture, 854-0492, Japan Tel 0957-37-3113 Fax 0957-37-3112						
Date of issue	31 th March 2007						
Site name	Location	City code	Site nambaer	North latitude	East longitude	Investigated term	Investigated area (m ²)
				° ' "	° ' "		
Ryuou Site	Imaide · Kawaharada	42362	86-64	32°	130°	03-Aug-04 13-Mar-05	4,000
	Hijikuro, Kunimi-cho		86-66	51'	17'		
Sinshouji Site	Unzen-City,	Nagasaki-Prefecuture, Japan		55"	21"		
					32°	130°	
				51'	17'		
				53"	38"		
Site kind	Period	Main features		Main artifacts		Remarks	
	Late Paleolithic	<ul style="list-style-type: none"> · pit · small pits · stone tool artifact concentrations 		<ul style="list-style-type: none"> · backed knife · End-scraper · Stemmed point on blade · Kacusuijyo-sekki · Microblade core 			

雲仙市文化財調査報告書(概報) 第2集

龍王遺跡Ⅱ・真正寺条里跡

2007

発行 雲仙市教育委員会
長崎県雲仙市千々石町戊582番地
TEL0957-37-3113

印刷 株式会社 昭和堂
諫早市長野町1007-2
TEL0957-22-6000

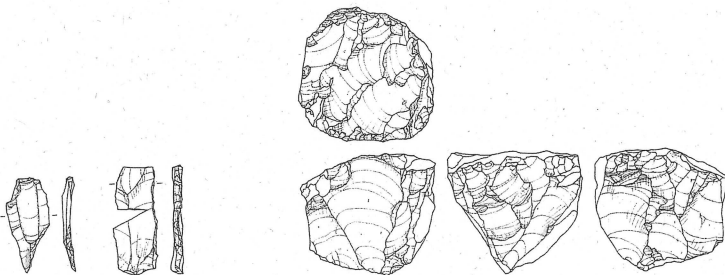
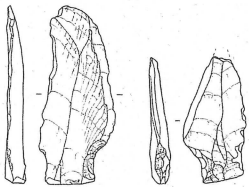
Report of an investigation Unzen City Cultural properties Vol.2
RYUOU Site II · SHINSHOUJI Site

(remains of rice field grids established by
the *ritsuryo* agricultural reallocation)



(the Paleolithic era)

Excavation Report with Kunimi Middle district Prefectural Possession field maintenance project



March 2007

Unzen City Board of Education, Nagasaki Prefecture, Japan